

「予ノ心ノ動カヌヤウニ」

栗原英二

目次

- 一、「附随ニ始まる」 佐々木
- 二、分岐点
- 三、「半金前金も差支なし」
- 四、「予ノ心ノ……」
- 五、「成立の真原因」 16 m m 「救済為性」

一、「附随ニ始まる」 佐々木

「予ノ心ノ動カヌヤウニ」は、広池千九郎博士の学術的言語と語録的言語との全てのうち、筆者の最も好きな言葉である。しかし筆者の個人的好みを離れて客観的に、博士の全生涯にこの言葉ほど、ありとあらゆる解釈を下せる言葉はほかにない。

以下の博士没後五十年記念の小論は、そのありとあらゆる解釈を述べるものではない。この特異の言葉の、事実を後世にとどめて、博士の全生命力を投入した救済とは何をさし示すかを記録するものである。

「予ノ心ノ動カヌヤウニ」

その事實は、大正十年、「モラロジー教育の起源沿革（広池千九郎遺稿、昭和十二年一月三日筆者推定 中田中氏^{ちゅうさく}の附随ニ始まり」、昭和八年、十年、十一年のモラロジー研究所創立十周年記念講演等の、博士最晩年の、もう二度としないとの「成立の歴史の概要」に於いて言及されたように、最晩年にまで繰り返言及された事實はほかには、絶えてない。

この「事實」を博士は、「実験」と呼ぶ。一般の文科系では、実験とはせいぜい中学高校のあの無味乾燥なPHを思い浮かべるぐらいであるが、理科系の優れた頭脳にとっては既成の原理の追認をなしつつ、努力すれば新原理の発見、ひいてはその構造の変革を迫る榮譽に至る実験を意味する。広池博士は文科系でありながら、『道徳科学の論文』は文科系の論文でありながら、敢えて「科学」を公称して打って出られたのは、右も有力な一因であった。

人の一生を考える時に、時期分けをするのを常とするが、この小論の方向では時期分けは無意味である。信仰とか科学とかの出生以降に化粧した、説明以前の分けられない中身を、実験の名に於いて行われた内容は広池千九郎そのものであるからである。

「実験」を私的に用い始めてから公けに使い始めるまでの博士の収集は、全国に渉りその数は方に近いが全ては、前宗教的因果応報ものにすぎないが、ある時期からにわかには具象化してくる。それ以後は、極めて積極的な行動に、しかも全く消極的の気風となる。すなわちこの事實は「実験」（その第二号と筆者は呼ぶが）として、既成道徳原理の追認を経て、新原理の発見、道徳科学の成立の一翼を荷なうこととなった。

その「事実」——「実験」の全貌の四百頁に渉る資料をくわしく示すことは後日にゆずるが、ここでは主なもの初めに全く知られてはいないが、モラロジーの「沿革」に一瞬の光条を投げかけたまま消え去った文書を掲げ

たいが、長いので割愛する。これを筆者は、広池博士の肺結核第一号実験とひそかに呼んでいるが、この佐々木敏氏は第一次大戦に召集され、たまたま中田 中の部下として精励に勤務され、解除後鈴木兵衛商店に入り、中田を招いた人であり当時の知識人であった。のちに本郷区西片町十番地にあるその社宅に入った中田はその同じ番地に住まれる広池博士に再会することになる。そうして前掲の博士草稿の頭初の「附随」となる機縁の人であった。その夫人が肺結核におかされ、横浜市郊外程が谷にあった避病院に入院され、中田は博士にご指示をうけ、度々お見舞いした。博士はかつて結核患者に懇切な指導を与え、効果の大であった例を思いだされながら指示された。当時肺結核は最大の難病とされ、この病院では固いするめをおかずに与え、見舞いに行った家族でさえも格子越しに再会させるくらいであった。それを中田は見るに見かねて自宅に引きとって療治させようと決意し博士に申し上げたところ、博士はその中田の心定めを大いに喜ばれ、実行にうつしたが、そのときの中田の家は四室で、夫婦と母と二歳の娘喜美子と、その上博士新設の神恵講飯会堂であり、初期の会員猪瀬 氏を同居させていた。筆者の近所でもあったのでその狭さはよく知っているが、どのようにして佐々木氏夫妻を世話し慰めていたのだろうか、繁く問い正しても、よくのみこめない。

この家は、昭和六十二年夏、とり払われて平らな駐車場になってしまい、何も語ってくれないが、お隣の西村孝也博士のあの三階建ては健在である。「附随」の発端となった、広池博士をお招きした家での「実験」第一号は、博士以下の必死の努力にもかかわらず重体におちいり、最後にはかく血多く、洗面器うがい用の塩水などのなかに、六十二歳の老母と二歳の乳児とがいた。

病夫人の死後、佐々木氏はこの活版のご挨拶状で真情を吐露されたのち、郷里京城に帰られたあと、ふしぎにも全く音信不通となってしまった。つてをたどりしらば、同地に赴くたびに調査もしたが、その後も全くわから

ない。筆者の想像としては、佐々木氏も感染し亡くなられたのではなからうか。

この「実験」第一号は、同時並行の二号三号その他のことからみあって、新科学樹立の要素となった。そういえる要因はのちにまとめて論じよう。ただ単なる実行のみではない。しかも、老母と乳児がいると知っておられる広池博士は、なぜ中田の申し出のまま当時おそれられた肺結核患者を引きとらせたのであろうか、併せて後に論じよう。

二、分岐点

ある時期に広池博士が集中して泊まれる家が、三重県亀山町(市)にあった。『広池博士日記 第三卷』によるとその頻度は、大正十三年一月二十二日、四月二十二日、五月六日、その家人二人畑毛温泉に博士を訪ねその一人は、残って博士を看護し、代筆し、奉仕することになる六月十二日、十月中旬、二十八日、十一月三日とある。西川弥太郎氏宅である。西川氏は代々亀山藩に医を以て仕え、中田家は同藩の奉行代官であった。中田 中の母た彌の実家、伴家の弟の娘たまの夫が弥太郎であり、その長女ちよはすでに大正十二年二月より博士に奉仕する。その上弥太郎のいとこ西川平三郎は、後に中田 中の末妹きみの夫となった。そのほかの一族もすべて博士に聴聞したために、博士のお泊りになる夜は聞き伝えて来客数十人に及んだ。亀山の地は、関西線と参宮線との分岐点であり、博士にとっては参宮にも大和にもわずか一時間であるためもあり、中田 中にとっては大正五年博士に始めてお目にかかってすぐに「附随」したかったが親戚の反対で果たせなかった故旧を、晴らしたい念願もあって各々力強く開発を進めた。このようにきわめて短い時間に、泊りと集まりと個人救済とを集中された例はほかにはない。

先述の「実験」第一号の佐々木氏夫人を避病院より引きとって療養しているとき、西川ちよはそのころ各県に一しかない女学校を優等で卒業し、すでに中田を通じて広池博士に奉仕することになった。中田の姉の長女の鈴木静子はすでに広池千英先生お宅に奉仕していた。続いてすぐ四月には「本部直属 神恵講成立の由緒」と題する博士直筆の日記に、

「勾田の家 三十五坪」(の項に寄進の金額を列記してあり)

- 一 五十円 中山家
- 一 二十円 撰行者
- 一 四十円 本部員一同
- 一 五十円 林 浪江様(と個人のしかも女名前の高額がみえる。)

この林家は代々素封家で、西川家の近くに大きな家があった。しかしふしぎなことにはお子さん方が十歳代後半に病に苦しむことが多かった。

静岡県田方郡函南村畑毛高橋旅館方 広池博士より 大正十二年十一月十四日

千葉県成田町 諸岡長蔵様宛ての手紙に

(前略)小生も二十四日に立立致し途中名古屋に泊り帰本仕り二十九日一寸大阪に出て、それから三十日又は十二月一日に亀山に中田氏神恵講へ引きつぎの御挨拶に同氏同道(中田氏は二十七日の夜行にて本部に参る筈)にて立ちより中田氏は多忙に付十二月二日の朝五時に東京へ向け帰ります同夜八時東京に着く筈

小生は八時に立ち別々になります亀山の西川弥太郎と云う人の所に一寸よりますので遅れ申し候十二月二

日夜着京帰宅仕候(後略)

後年筆者らが振り回されたような目まぐるしさがすでにある。

静岡県畑毛温泉 大正十三年一月八日 広池千九郎より

東京本郷区西片町十とノ六 中田 中宛て手紙に

御苦勞奉存候 さて大祭のかえりに小生一人西川へより信仰をすすめ追い追いに神様もまつり込可申 就いては最高の表一枚別に(西川分)御持参願上候 二十二日に出立

最高の表とはその固まっていた道德の比較表の謄写版刷りで、神様をまつり込むとは昭和十一年までは、科学的教育を施しつつ、日本人として日本古来の天地神靈の代表として伊勢神宮の御分靈をおまつりして、初めてモラロジー会員として認められることを意味する。

いづ(畑毛) 大正十三年二月十四日 広池博士より

東京府下中野町本郷六二 中田 中宛てのがきに

(三)静子は宅多忙に付くるに不及候 小生も自分にてコツコツ少々つやります 千代子氏にも手伝いたのみますからもはやこちらは人は入らず候 右申上候

この宛名の東京府下中野町本郷六二番地こそは、モラルサイエンス研究所仮事務所の公称を、始めて用いた場所であり、中田 中家族は大正十三年二月十三日に移り、翌十四日には広池博士は右の郵便を出されている。ご自宅の移転については全く無関心であった博士は、ご自身の移動の救済に少しでも関わる場合と、開発救済の場所の移動については、やかましすぎるくらい厳しかった性格が、ここにも見える。今あの新宿高層ビル群の北五百メートルのあたりである。木造家屋の、しかも七畳半の間借であった。そのような壮烈な中に展開する「実験」はどのような様相であったか。

上記のがきにより僅かに知られるように、西川ちよは博士のお招きにより、二月二十一日に畑毛温泉鈴木館琴景舎に再びついた。そのころは広池博士に奉仕する人といっても続いている人はなく、六十二歳の中田た彌は幸い壮健であったため前年より、時たま帰りはしたが続いてお傍に奉仕していた。そこへ当時まだ稀な女学校出の、しかもきれいな字をかく西川ちよが加わった。八か月ほど後に縁談のため一時帰郷して困った博士のお手紙に、

五 なれぬ人でこちらも大困却 教育のある千代子のような人がほしい

と記されたことはほかに例がない。その数日後、『広池博士日記 第三卷』に、

三月六日(前略) 今日より千代子の鼻も大いによろし 御授けをはじめてよりおよそ二週間目なり

とあり、この文を文字どおりに見れば二月二十二日から御授けを、ちよは受けている。授けた人―神の代理人とでもいうのであろうか―は博士かまたは中田た彌か、この文面だけからはわからないが、博士はそのころよく中田た彌から御授けをもらっている。

三、「半金前金も差支なし」

医師西川弥太郎より広池博士に宛てた手紙に、林家の実状を窺い知る長文がある。

三重県亀山町 大正十三年四月十四日 西川より 畑毛温泉 広池千九郎殿

(前略) さて林 茂夫様昨日診断仕候処格別の御変りなくやや徴候を減じ候哉と存候も四五月頃は御承知の通り病状の経過に変動し易き季節に付決して油断は出来不申候

先生は前便にては来ル二十六日の大祭には大和に御在住の様拝承仕候 二十七日の夜には私方に御一泊お願

申上度御序手の節(下略)

この手紙によると、林家子息茂夫氏はすでに臥床中であり、あまり軽くはないらしく、その上に前述の佐々木氏夫人と同じく肺結核らしい。事実、博士は前に西川宅に泊まれた折りに林家家人と度々懇談を重ねている。再びその機会をとの申し入れてである。博士はそれに応じられて、大和への前と後とに西川宅にお泊りになった。

『広池博士日記 第三巻』 大正十三年五月六日の項

五月六日 亀山西川弥太郎氏宅に止宿 御話をする 午前四時火消しつぽより発火す 然るに隣人これを発見して大事に到らず 一家皆神様の御かげ小生止宿のためと申して神様に御供えをする そこでいろいろ話しの結果いよいよ神様を御まつり込みする

この直前には左のように記されて、特殊性を強調しておられることは注目される。

○さて今回教理の完成と 本部にて連日朝六時より夕六時までも努力せしことは 大正元年より始めてのことなり 神様の御守護実 に特殊のことありと考う

これと申すも今回の教理は 諸岡氏以下誠の人々の御心も籠もつてある結果 予は道具につかわれてこの教理の仕上げをさしていただくものと考えるほかなし 左なくしてはかく連日の働きでくるはずなし

この四月二十一日から五月六日までの大和行きは広池博士の生涯に、きわめて重要な節目であるが、この小論はそれを論ずるものではないので他日に譲るが、ここではその重要な節目の前と後とに西川弥太郎宅にお泊りになつて真剣な祈りをささげられたことを記しておく。その上にこの大和には、千九郎、千英、千太郎の三代お揃いで行つておられることの超重要性を示すのみに止めておく。

ふしぎなことにその超重要性を示したその頃、大正十三年五月一日付けの、しかも中田中名儀の活版印刷物が

ある。その頃再版された「近世思想近世文明の由来と将来」に扉の挟み込みとした一枚刷りである。大正四年十二月十五月初版、大正十三年五月二十五日再版の一五〇頁のこの書物の発行所は、東京府下中野町本郷六二番地モラルサイエンス研究所仮事務所となつていて、モラルサイエンス研究所を初めて公称している。表紙の題字の右には法学博士広池千九郎講演、左にはモラルサイエンス研究所発行といずれも木版刷りで、その上には赤く英語で数行印刷されてある。今となつては現物が数冊しかないので後世のために記しておこう。

THE ORIGIN, GROWTH AND FUTURE
OF
MODERN THOUGHTS AND CIVILIZATION
BY
CHIKURO HIROIKE
HOGAKUHIROKUSHI "DR. OF LAW"

読者諸君へ謹告

中田手記

広池博士は三十余年来、法律学の「研究の外に「モラルサイエンス」(道德学)を「研究せられております。

その主旨は現代世界文明国の道德なるものは、全く形式的にして、これをもってしては、現時の労働問題・国際問題等あらゆる難問題の解決は出来ぬのであります。従つて個人の幸福は得られぬのであるといふので、これを全世界の歴史的事実及び社会学的事実より抽象し来たりて、最高道德といふものを発見せられて、これを世界の人類に守つていただかうといふのであります。

最高道徳は我が国にては、天照大神これをご実行遊ばされて、万世一系の基礎をお建て遊ばされておるのです。(まだ世界には、この外にも実例があります。)故に我われ民衆でもこの最高道徳を行なえば、必ず健康・長命・開運ないし子孫永久の幸福が得られるのです。しこうしてこういう事を科学的に証明したのが「モラルサイエンス」です。これは和文・英文共に明年は出来るはずで、そこで本書をお読みになってご共鳴下され、なお一層深く最高道徳をご研究下されて、幸福を得たいと思ひ召すお方は、更にモラルサイエンスをも一層深くご研究下さいませ。

大正十三年五月一日

中田記

広池博士が中田に命じて書かせた文章はいくつかあり、中田 中名儀になつてはいるが趣意はもとより博士の意志である。文章そのものは、中田が記したもの・中田が記した文を博士が手を入れたもの・その逆のもの・博士が簡明にいわれたことを中田がやや詳しく記したものなど種々であるが、この場合は最後の方法に更に博士が細かい所を手を入れたらしいが、博士ふうの文章を避けようとしたらしく思われる。それよりも、全文を通じて宗教的空氣への言及なく、最高道徳を研究し最高道徳を行なえば幸せが得られるとの主意を通して、後半生の萌芽を読みとりたい。

その「近世文明」誌の再版は論議の多い事項で、詳しくは後日にゆずるが、ここではこの小論に添って見ると、奈良県 大正十三年五月二日 広池博士より 中野町本郷 中田 中宛てのはがきに

近世文明はすぐにかかり、五月末にでくるように願ひ上げ候 代金は引きかえに渡す 半金前金も差支なしと生涯只ここだけの文面であり、また

同所 同五日 広池千九郎より 千葉県成田町 諸岡長蔵様宛ての手紙に

近世思想印刷は中田氏に命じて、五月中に印刷出来候様 先日御地場にて校正本を同人に渡置候

とあるところを見ると、先述の超重要性は何を意味するのであろうか。この時期に、モラルサイエンス研究所の名を公表した舞台が、近世文明への批判育成であったことに、筆者は大きな感銘を覚える。しかも時を同じくして、「実験」三號進行中である。筆者のひそかにいう第一号は先述した。第三号は別途「典型」の名で記したことがある。実は一号も何号もすべて「典型」であり、それぞれに具体的現象であるからには、それぞれに意味内容が異なるのは当然であるが、この超重要性の時期に全く並行して進行した「第二号」はにわかに交流が激しくなる。交流どころではなくなる。同流とでも称するのであろうか。あるいは同行どうぎようとはこのような状況をいのであろうか。

大正十三年五月二十一日に博士は、上記の中野町本郷のモラルサイエンス研究所仮事務所にて講話された。その日かその前日(筆者推定)に記された長いお手紙を掲げよう。

林 なみ江様 牛込 広池千九郎

口上

昨日ハありがたく候 今すこしはやくくはしい御話を承ればすべて御幸福ニ相成候ようニ可仕処を残念仕候 乍併御嬢様とかの御病氣のもようにてハ回復出来可仕ニ付ようだい御報願上候 おきて居る位ならば一日もハヤいがよいから伊豆ニでも一寸御つれヒ下候ハハ必回復するようの御話を可致候 あなたも御一処ニ約五六日間も 右一寸御伺申候

○しかし伊豆行ハ一寸思いつきし次第第二付しひて御すすめハ不致候

○亀山通過ハ七月上旬ノ見込(中略)

(封筒裏に加筆) 伊豆へハ六月上旬行くつもり 場処ハ西川千代子さん御承知ニ候。

このころ博士は五月八日に帰京され、十一日と二十一日と中野町本郷のモラルサイエンス研究所にてお話があったが、そのお集りには遠くは神奈川県戸塚、横須賀、北千住、月島、多摩川、西片町などの遠方から乗り換え乗り換えて、その上三〇〇メートルも歩いてお集まりになっている。そのうちの現存者は四名、すべて女性である。上の加筆のように博士は六月九日に畑毛温泉に着かれた。

博士のこのお手紙を中田は、漢方薬などと共に林さんへお送りした。林家ではその後もお手紙を保存して居られたが十五年ほどのちに、中田 中はそれら全てを譲りうけ、中田宅の、博士により命名された中田の雅号をそのままの木山舎に保存してある。

右のお手紙には、伊豆にとお招きになって居られる。先の佐々木氏のように中田の宅ではない。七畳半の間借では物理的に不可能ではあるが、宿屋ではあるが自分の手許で心身ともに療養させようとの現われであろう。

伊豆畑毛温泉に着かれてすぐ西川ちよを呼びよせて、

大正十三年六月十一日 中田 中宛てのはがきに

(前略) やはり一人では骨折れますから千代子嬢を呼ぶ事に致候

『広池博士日記 第三巻』六月十二日に

一、十二日 西川

とだけ記しておられるが、西川ちよが来着したことを示している。その日ちよは林 浪江さんの言伝てを博士にお伝えした。

十三日 広池博士より 中田 中宛てのはがきに

(一) (略) (二) 千代子さん加勢たのみ、参り候

(三) 十八日に林母子参り 母は四五日居り 娘はシバラク滞在のよし

翌十四日 西川弥太郎より 広池博士宛て手紙に

先日は先生及中田様より御尊書拝見仕候 其節御返事不仕失礼仕候 千代子安着の御報確に了承仕候 不行届勝の者何分御助け被下度候

林 なみ子殿と娘様は十八日に出掛け十九日より御話し拜聴可仕旨申居られ定し千代子より申上候事と存候 拝借の御助け一条の本は写し取り至急御返却可仕考にて寸暇を盗み半ば謄写仕候 然るに御惠授被下候由難有拜受 家宝として拜読(下略)(封筒に 心使ひと博士加筆)

西川ちよはただちに博士の代筆などを奉仕している。

この辺りは博士の内面行動劇しく、文献手紙など甚だ多いが、博士の生涯の、全部のお手紙のうちでもただ一通の、四人の手紙が同封されていて、しかも博士の近況のよくわかる珍しい手紙を掲げよう。六月十八日には筆者のいう「実験」第二号はお手許に参着するはずであったが、その林さんの近い親戚に次々と不幸あり延期して、七月半ばになった。

伊豆 大正十三年六月二十二日 広池博士より 中野町本郷 中田 中宛て

要件 (博士の長文 略)

- 一 先日来(四五日前)より少々発熱 神経衰弱 御不快に御座候
- 二 助手の事に付九日頃一度上京しようかと御思案中ですが、いまだしつかりきまりません 何やらごてごて出来事がありまして、御困りに御座候 ないちよります

ないちよりますとは、博士の出身地九州大分地方の方言で、泣いて居ると苦慮している状況を、西川ちよが真似た。

当時「道德科学の論文」執筆の直前で、新科学構成の最後の階段であり、最も意を注がれた「伝統の原理」の構造が極めて不十分であることの苦慮の最中であつた。このような濃密な煙幕を突破するには、風下へ逃げては却つて煙にまき込まれるゆえ、思いきつて十二分の準備をして、逆に風上へ走れとの、ガラス工業の丸井氏の言に力づけられたのもこの頃である。しかもその方法を、「実験」の場を、「救済」と「伝統」とにもとめたのであつた。その「救済」たるや、当時最難関であつた肺結核を足掛かりとして、その家の運命を立て直す方向をとつたのであつた。この頃の資料は「論文」の原稿を始めきわめて多いが、その中でもこの小論に密着したものの一つに左記がある。

畑毛温泉広池博士内 中田た彌より 大正十三年七月十三日 中田 中宛て

(前略)先生も此の頃は昨年の通り気分あしく、昨年よりもほどかるいけれど、只のうがわるいから、ご本部にはご自身一人で参るつもりでおられたけれど、鈴木さんがいられてからは、一日も研究せずに毎日寝たり起きたりして、すこしよいと鈴木さんのそばへ行つてかいた物を見られるとじきにのがわるくなるから、なるべくこまかき物は見やん(見ない)ようにしておられるから、とてもおやさんにかいらしていただく事はむづかしいから、おまいにいつてもらうようになりましたから、いづからすぐにほんぶにいくつもりでしたくをしてきてください

わたしも此月の二十日頃にかえるつもりでおりましたけれど、とても今ようかえらんから九月十日ころまで伊豆におるように申しておられますから、(中略)

伊豆におるようには、わしのびょうきは千代子さんとおばあさんのおかげでなおると申されます
すず木さん(利三郎)はまい日一人でけんきゆうしておられます 先生はまい日三べんぐらいおたすけさして
もらい、やぶんは千代子さんに十時までまっさあじをもらいまして、かわりましてわたしが二時か二時
半ころまでさしてもらいます 朝は五時半におきますから、やすましてもらうひまはすこしですけれど、さ
ほどつかれもしません(中略)

(二伸の形で)

先生の申されるには、わしのびょうきは千代子さんとおばあさんのおかげでなおると申されます

そえがき 先日やどやにたんものをうりにきまして、其おりニ先生がじぶんのみはからいで、てぬぐいゆか
たをわたしと千代子さんとおことわりしてもこちらではてがみをかくひまもないから、したてとゆうことは
むづかしいから(下略)

これによると、日々三回ほど博士は林家の人にお話をされたらしく、新科学の構築と救済とを同時並行されて
いたことになる。御疲れも相当なもので夜半二時半ころまでマッサージを、ちよとた彌とでつとめていた。その
ようななかにも、行商からゆかたをもとめてた彌たちに与えて縫わせようとされている。

さらにその少しあとの「日記」七月十五日の項に、来着していた林母娘に対して、

一、林氏ニハ自然ノ指導ヲ与フ

と記されたその「自然ノ指導」とは何を意味して居られるのか、異論百出であろうが、実は筆者はここを広池博
士にも中田にも聴いておくことを失念したことを、一生の不覚と諸氏にお詫びしなければならぬ。数十年間こ
とある毎に思い起こして無念である。

西川ちよさんは結婚後も博士の奉仕を時々され、この六十五年後の、昭和六十二年十月に思い出話をされたその一節を掲げよう。

広池先生から一寸書く事及びコマゴマとした用事を手伝ってほしいとたのまれて、伊豆へ行きました。畑毛の旅館の割合広い一室には研究の書類で一杯でした。

中田 中さんの母上(た彌さん)も煮炊きなどのお世話に行つて居られました。

他の一室にはその頃林さん方の娘さん(十七、八歳)が肺が悪くて療養かたがた泊つて居られました。林なみえさん方はご長男も同じ病気でどこかの良い地方へ静養に行つて居られた様でしたし、お宅は亀山のご大家でなかなかしっかりした立派な奥さんで、四人くらいお子さんがあられたかと思ひます。皆聡明そうなお子さんで幸福であつたのが、成人されて年ごろになられると次々大病にかかれて、不幸な事でした。その為広池先生のお話をよく聴かれていたと思ひます。お宅としてはその頃あちらこちらと、とてもとてもお忙しそつでした。

事業をある程度しておられたため、大阪東京など往来していた林 浪江さんは、畑毛より帰宅の翌日、東京遊学中の弱い令息が発病、杏雲堂病院へ入院されたので上京、中野町のモラルサイエンス研究所にも見えた。中田中も博士の御指示を受けながら、杏雲堂病院に始終お見舞いした。

この頃御集まり、あるいは開発といつても誰でもというわけではなく、相当十二分の配慮を必要とした。ある旅行の途次大木を見上げて、「このくらい巨大になれば人間が体当たりしても、体当たりした方が跳ねとばされるが、芽出しの時はちよつと踏まれてもつぶれてしまふから、よほど注意しなければ」と、述懐されたのはこの頃である。

その様な中でも、林 浪江さんだけは特別待遇であつた。

四、「予ノ心ノ……」

広池博士の生涯の中に、モラルサイエンス研究所とプロデューティ・ソサエティと神恵講との並立と、「道徳科学の論文」と「近世思想近世文明の由来と将来」と「天理教教理」の提出との並存の、この時期の解釈は最も難しく、またもつとも易しい。

易しいとあえて言い切つたのは、ある時期を境にして、際立つた考え方が突如(と見えるくらいに、実はそうではないのだが)現われて、それを以て解釈すれば全てが、生き生きと生命が与えられるからである。

上記の、並立併存のこの時期は又「実験」の並行の時期であることが、博士の他の時期とを画然と区別する。この小論は、いつか好機に譲る並立併存並行を論ずるものではないのだが、片鱗を示した並行の進み具合を重ねて見てみよう。

併存の一面でもある「勾田の家」と通称される家屋の建立こそは、広池博士の最初の新築建造物であり、御自身の住まいへの全くの無関心とは全く逆に、全力を注がれたといつてよい。その数百枚の資料の中から、この小論に深い関わりのあるものに左記がある。

大和 大正十三年九月三十日 広池博士より 中田 中宛て手紙に 至急御親展

十五日より二十日までの間に移転可致候

拝啓 御苦勞様に奉存候

さてこちらのふしん予想外に入費かかり候 始めの予算に……すべて之が為に不足甚だしく……合算約一千

円の入費、予算二千円より相嵩み閉口致候。それはとにかくとして現金之不足差当り困難致居候。千英に相談の外無之内々申しつかわすつもり候間御安神下され度。乍併此事情は深く御諒察願上候。但し母上とかず子(中田た禰と同加寿子)殿には内々御話置き被下度候。此上御互いに深甚の誠意を以て御守護をいただかずば相成不申事と存居候。

乍併事業は一日も休むべきにあらざる候間研究はいよいよ大いに進めねばならず候に付、一度鈴木を御訪問被下候て慰安を与え、且つ原稿をいそぎ候様暗に御話被下度候(尤も本人も真面目にいそいで居る)次に土地も千英と共に一つ見に行き被下度候。土地丈はいそぎ候。

次に大祭参拝の次第左に申上候(中略)

以上

記

一、途中名古屋亀山の各位にそちらより御出状をして一同に御いで願上候。林おく様も参拝するよし

一、二十四、二十五夜はいろいろ重大の話可仕候

右御一同様へ御話願上候(下略)

これからあとつぎつぎと、博士のいままで知られていない一面が現われてくる。

三重県亀山町 大正十三年十月三日 林 浪江より広池博士宛手紙に、

御なつかしき御玉章御多忙中をかへり見ず御親切なるこまごまとの御言葉有がたく深く御礼申上候。日々御ねんごろなる御授をして戴き其の上真綿迄おそなへ御授けをして御送りたまわりし由。誠に有がたく御礼申上候。かつ子の方へも御送りたまわり、何から何迄御厄介御かけ申候。

過ぐる日はわざわざ御立より下され、其の節は御つかれの御中をいといと御親切なる御話承り有がたく万ばん御礼申上候。茂夫も其の後御蔭を以て追い追ひよろしく候へども、とんと夜になるとねむりませず毎夜西川様御親切に十一時ころ御越したまわり、ねむり薬をちようへいれて戴きますとねむりにつくと申すありさまにて、誠に困り入り候しかしこれと申すもまだまだ神の御心になわぬ事と、此上は何としても一心に人心救済の道を先にして日を送り申べく決心に御座候。

過日先生の御前にてちかいし事は必ず実行致すべく候。

いろいろと外より親切に申され候ても、決して外へは心をまわし申さず、ただ一心に真の心にて先生の仰せ下さる事を、かたく御まもり申べく候。何かと御心おきなく御教えたまわり度願上候。

本月二十二日には千代子さまと御一同に、是非是非御地場の方へ御かへりさしていただき度心組に御座います。其の節は宜しく御願上候(中略)昨夜も西川さまが私のかわりに先生の方へ容体申上下され候由承ります。誠に相すみ申さず候と申上候次第に御座候(下略)

十月三日

林 浪江

広池先生

短時日の間に、自身あるいは家族の治病よりも、人心救済につくす事こそ本筋であり、その余効によって治癒する理を、博士の訓育によってさとったことを、読者諸氏の記憶に留めたいために、あえて長文をかかけた。

この辺りの、博士のお手紙二三通が見当たらないのは残念であるが、多分出入りの多いためにまぎれたのであろう、今後を期したいが、あの多端の中を毎日のように何等かの心くばりを示されていることは、筆者にとって極大の戒告である。

このあと博士の行動は、郷里九州豊前豊後の伝説上の人聞法師を思わせる多端の極致となる。その中にも林家に対する心遣いは、いま願みても驚くばかりである。

それを先ず『広池博士日記 第三卷』に骨組みを見よう。

十月十八日 まがた新宅へ移転

十月二十日 (首脳部)を招待

十月二十二日 東京信徒本部宅へ

十月二十六日 春子、千英、富 本部宅へ

十月二十八日 参宮、予亀山まで

十月三十日 本部へ

十一月 三日 亀山

四日 畑毛

となつてゐる。とすれば亀山に二泊の後、五日目にまた一泊されていることになる。これほどの頻度は他に例はない。目標は偏に林家であろう。この僅か数行で数十字にすぎないこの部分の解釈は、甚だ難しい。『日記』を味読する際に十二分に留意しなければならないことの標本として、この部分があるといつてよい。字数の多い部分は目につきやすいし、又解釈し易いが、引きずられるおそれもある。字数のきわめて少ない場合は、誤読するおそれもある代わりに、より深く味読することができ、眼光紙背に徹するとはこの境地を指す言葉であろう。そう固く考えなくとも諸氏自身が、完全主役で日記などを書けなかつた場合、たとえば自身の結婚式の詳しい記録などは地球上に存在しないから、自身の結婚などは全く意味がないとはいえないだろう。逆に結婚から社会人と

が。
してみとめられる第一歩を踏みだす大きな意義をもっていると、考えるのが当然であろう。書籍文献などを見る際注意しなければならぬ。そこでこの場合、充足するものとして左記を提示しよう、実は一部分は先に示したが。

奈良 大正十三年九月三十日 広池博士より 中田 中宛て手紙に 至急御親展

(前掲略) 記

一、十月二十二日御席の方々は午前十時半丹波市着の事

一、途中、名古屋、亀山の各位にそちらより御出状をして一同に御いで願上候

林おく様も参拝するよし

一、二十六日午後までには一同全部引上げの事

一、……等は二十三日又は二十四日に御いで願上候事

一、小生二十二、三夜は御道の御話可仕

二十四、五夜はいろいろ重大の話可仕候

右御一同様へ御話願上候

一、小生家族は二十四日に参拝 二十六日に立出、伊勢へ参拝するように申しやり候えどもこれは未だ確定

せず

右(下略)

右と前掲の『日記』とを総合してみると十月下旬は次のようになる。

十八日 勾田新宅へ移転

二十日 首脳部招待

二十二日 御席試験の人々着 林 浪江、西川ちよも着く 博士御道の御話

二十三日 試験以外の人々着 博士御道の御話

二十四日 同右 博士重大な御話

二十五日 博士重大な御話

二十六日 春子千英富の各氏着

二十七日

二十八日 博士一家参宮 三氏帰京 博士亀山泊り

二十九日 博士亀山滞在

三十日 博士大和へ 十一月二日まで

三日 博士亀山へ

四日 博士畑毛へ となる。

一見していくつかの疑問に気づくがこの小論に添えば、林家への心入れが目立つ。そのうえに注目すべきことは、御道の御話と重大な御話とを統いてそれぞれに二晩も費やして居られることである。この「重大な御話」が実を結ぶには、まだ約一年を要するがこの小論とは別の大命題なので他日に譲る。

奈良 大正十三年十一月三日 広池千九郎より 中野本郷 中田 中宛ての葉書に

三日亀山泊四日畑毛へ林令嬢見舞いついで二連日の疲れを直す為十一月十日頃まで滞在二付皆様へよろしくとあり、先述の「神恵講 成立の由緒」と題する日記の後半は、この前日に記憶の薄れないうちに記されたもの

である。

三重県亀山町 大正十三年十一月六日 西川弥太郎より 畑毛 広池博士宛て手紙に

御心に懸られ早速御安着状を賜りたしかに拝見仕候 先般来再度の御尊来乍例誠に殺風景何等御構いも不仕
実に汗顔至極に存候 真に慈悲寛大の御心使いは生の両親より孫優りて難有存じ居候 毎朝夕神様を拝する
度毎に拝謝仕り居候 毎度御心附を恭ふし千代子御同伴被下不徳の我々親子を御救済下さるの御真意はあり
ありと我心に感じ申候(中略)

林かつ子様の強壯剤十日分、劇咳止少々、グワヤコルポリタミン千代子に事附け候 消化器に格別の故障なき限りハ此のグワヤコルポリタミン連用可然哉と存候 茂夫様御変りなく次第に体重を増すは神様に御願い奉り候効果顕著なりと信じ申候(下略)

畑毛温泉滞留中の広池博士お手許に呼び寄せ療養させていた林かつ子に、その郷里の医師西川弥太郎から滋養剤を送っていた一文であるが、博士があのだ多端の際に度々亀山町に立ち寄って林家西川家その他周辺の人々を教化していたことがよくわかる。九日には西川一族の一人が博士を訪ね東京にて開業のご指導を受けている。

ところが突如、中田 中へ電報が、しかも夜、舞込んだ。

静岡県ダイバ局 十一月十三日 ヒロイケ 東京中野町本郷 ナカタ ミツル宛て

ハヤシサンワルイオバアサンスグコイ 午後七時四十四分着

いかにも確かに急いでいる文面である。当時オバアサン事中田た彌は家庭の用事で、中野の家に帰っていた。そこで翌朝伊豆に行く支度をしていた九時八分又また電報が入った。

十六日カヘルオバアサンコンニチキテクダサイ

前便ではご帰京は十五日と承知していたが、一日延ばして予定ぎりぎりまで様子を見ようということだろうと、オバアサンは十四日に畑毛に赴いた。

三重県亀山町 十一月十七日 林 浪江より 中野町本郷 中田様方 広池千九郎様

拜啓 只今千代子様御越したまわり御手紙嬉しく拝見致し且ついろいろくわしく御話承り候 此度はかつ子神さまより御手入れをいただきそれに付御つかれの御中を夜の目もねずに御看護下され候由、実にいつもながらの御親切何とも御礼の申上やうも之なく候 早速中田御老人さま御よびよせ御助け下され候由、誠に有がたく涙と共に喜び入候 御蔭を以て追い追いに快方に向わせていただき候由承り安心致し候

私早速伊豆の方へ御伺申すが本意に御座候へども、只今少々取込事之あり、かつ先生の御言葉千代子さまより承り候処、先生伊豆へ御越しの節参れとの御言葉いただき、其の節御邪魔致す事に致し候

誠におそれ入り候へどもしばらく中田御老人さまに御厄介に相成わけには参りまじく候や 何とぞ先生より御願い下され度、かつ子一身上に付いろいろ御心配相かけ申訳なき次第に御座候 何とぞ御助け下され度私のかんがへは本年の冬は、伊豆の方にて御厄介に相成るやうに思い居候 何とぞ宜しく御願い申上候

私の此度の決心はどのやうなる人が何事を申ししても、決して心をひるがえる事は之なく候ゆえ御安心下され度、何とぞ家内一同神さまの御用を致すやう一日も早く相成申度日々心に祈り暮し居候 何事も皆先生のおさしず通りに致し申べく候 每まい御心配相かけ候茂夫日に日に快方に向かい、此の頃は誠によく肥えて参り候ゆえ御安心下され度、拝借致せし御本を日々こたつにて拝見致し居候

時節柄御身体御大切に御なし下され度祈り入り候 先は失礼ながらまわらぬ筆にて御礼申上候

あらあらかしこ

十一月十七日

林なみえ

広池先生

これによると、西川ちよは博士のお手紙を預かって十六、七日に亀山町に帰り林さんに様子を詳しく知らせている。その上に「神様の御用を致す」決意を述べている。その頃の博士の心配りがよくわかるので、長文ながら敢えて全文をかかげた。その宛名の中野町中田方博士になっていることで、日々の博士の居所を林さんに知らせてあることがわかる。その翌日、十一月十八日には、『日記』にも記されてあるように、その場所中野町でお集まりがあった。

中田た彌は十四日畑毛に着き、十五日に博士上京、十六日に西川ちよ帰郷、十七日西川ちよは林家訪問、十八日博士中野町にてお話、ということになる。この辺りから、博士も各氏も動き劇しく再生に骨折るが、そのうちの広池博士から中田 中への覚え書きの一つを掲げよう。署名も宛名もない、極めて珍しいものである。

一、御苦勞二候

二、別紙よろしく

三、すべて書類ハ控えをとりて後日ニのこす事 つづりて冊にしておく事

四、林カツ子さんわるい 困って居ります 尚神様へハ願ってをりますが ねこんでしまった

母上二十日ニ来る つれてかへらせたいが途中があんじられる

五、なれぬ人でこちらも大困却 教育のある千代子のような人がほしい

最後の行は先掲したが、それはそれとして、博士のお考えが少し揺れ動いていると見るのは筆者の僻目であろうか。

大正十三年十一月十三日午後ヨリ林カツ子腹痛

夜十二時至午前三時

十四日終日イタム 中田老母夕方着ス

十五日始メテクズユヲノム 夜一度イタム

(1) 母親ノ心ノ動カヌヤウニ注意

(2) 子ノ心ノ動カヌヤウニ

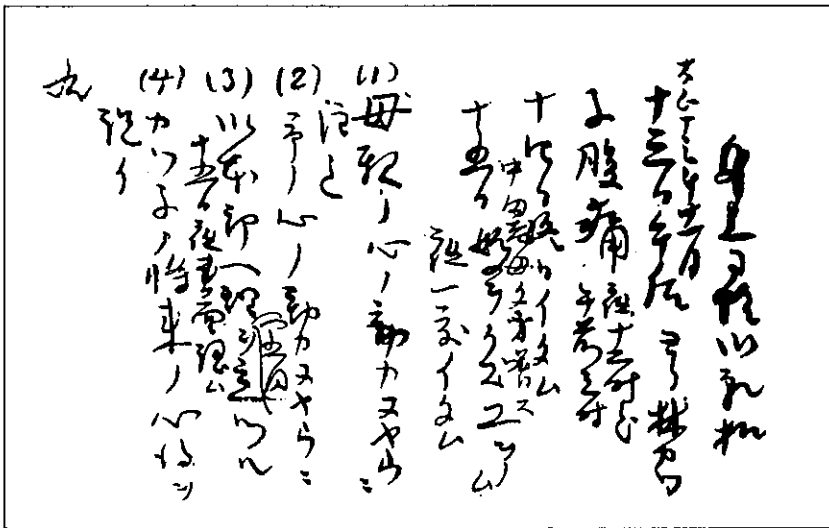
(3) 御本部へ理(五円)ヲ立ツル 十五日夜書面認ム

(4) カツ子ノ将来ノ心得ヲ説ク

右(下略)

これがこの小論の題名の実物である。五十三年前の筆者初見以来、片時も脳裏を離れたことがないと同時に、いかなる解釈が最も正しいのかいまだに全くわからない、謹んで諸兄のお教えをおおぎたい。今はただ、広池博士の、これまで見てきたような實際の渦中に身を投ずればわかるぞと、博士は言って居られるような気がするだけである。

この全文は、前半の 右 までは十五日深夜に神楽町のご自宅で、



右(下略)の後半は十八日お話のあつた中野町に泊られて、翌十九日朝記されたものである。博士は事ある毎に、八足台に祈られる事項を記された紙をのせて、その前で長時間お祈りされるを例とした。ここに掲げたものはこの時の実物である。この小論の題名の、「子ノ心ノ動カヌヤウニ」は、広池博士の著作幾千万字以上であらう字句に、ただ一か所ここにある。しかも筆者の密かに呼ぶ「実験」の峠にある。

筆者はこの字句を思い浮かべる度毎に、「エリ エリ ラマサバクタニ」がつかがって出てくる。キリストの処刑台上の最後の言葉として有名なこれは、二千年後の今日も論議の種である。イエスキリストは三十歳、広池博士は五十八歳の違いを、仮に平均寿命の差として同年と見るとすれば、あとは地域と状況との差がおもな違いであらうか。その中でも決定的な違いは、「実験」としての重病人を手元呼び寄せ、夜の目も寝ずに、その根本的な運命の立直しにかかっていることであらう。これが「エリエリ……」のやや疑問符のつきそなうな気配と「子ノ心ノ動カヌヤウニ」の、神に心身を捧げきつてなおその上に自らのその捧げた心の動かぬ事を祈るとの違いであらうか。

五、「成立の真原因」 16mm 「救済為性」

次に掲げる手紙は、内容も大切であるが、その形が、博士の書簡の膨大な量の中にたった一つのものである。封筒表宛名広池千九郎殿も、裏差出人中田 種(博士流書き方)も博士の直筆で、つまり博士が代筆して居られるのだ。しかも中身の手紙は中田た彌のものではなくて、この「実験」の当人の林かつ子の筆になるものである。

静岡県大場局 大正十三年十一月十九日 中田 種(所番地なし)

東京牛込区神楽町二丁目二〇 広池千九郎殿

林かづ子
御前
十一月十九日

林かづ子
御前
十一月十九日

先日是一方なもぬ
内世話様に相成り
又私の為めお帰り
になる日までお延ばし
下さいましてまことに
有難く厚く内礼申
上ます

陰様にてすこし頭痛
みはせず 夜もよく休
まれるやうになりました
これ全く神様のお蔭と
心から感謝致して居り
ます
食事は初めはくず湯
をつたひきそれからう
すき重湯をいたゞき、
だん／＼とこくして昨
日のお書よりうすいお
かゆをいたゞくやうにな
りました まことに神様

皆様の御蔭と内礼申
上ます 私もこれから
は一心に神様におすがり
して人様を助けさせて
ゐたく心になります
右の吹津にてどうか
内 空心下さいませ
乱筆にてお許し下さい
十一月十九日 林かづ
廣池先生
御前に

先日は一方ならぬ御世話様に相成り又私の為めお帰りになる日までお延ばし下さいましてまことに有難く厚く御礼申上ります さて其後お蔭様にすこしも痛みはせず夜もよく休まれるやうになりました これ全く神様のお蔭と心から感謝致して居ります
食事は初めはくず湯をいただきそれからうすき重湯をいただきだんだんとこくして昨日のお昼よりうすいおかゆをいたゞくやうになりました まことに神様皆様のお蔭と御礼申上ります 私もこれからは一心に神様にすがりしてどうしても人様を助けさしていただく心になります 右の次第にてどうか御安心下さいませ
乱筆にてお許し下さい

十一月十九日

林 かつ

廣池先生 御前に

(封筒裏に 博士赤鉛筆で 林カツ子ノ助カリシ事 と加筆)

一七歳の少女が書いたとは思えない礼儀正しい立派な、「実のある」手紙とはこのような手紙をいう。あるいは古語にいう「鳥のまさに死せんとするやその声かなし」を現しているのであらうか。この一月後、博士と中田た彌の腕に抱かれながら、急死してしまう。すなわちこの唯一通の手紙が、「実験」第二号の、後世の人々への遺書になってしまふのだ。

このあと四日ほどは中田は開発に逐われていたが、突然電報をうけとる。

ウシゴメ 十一月二十三日午前八時四五発 ヒロイケ ナカノマチ ナカタミツル宛

(廣池博士自身が) ハツネツスキテクダサイ

これについて中田は後年、博士に「別紙電報はその頃午込より御使いニ来て下さる人も無之事を証する電報ニ

候」と、わざわざ説明している。

『日記』第三巻にあるように、「十二月三日 中野神恵講にてお話」をされてお泊りになった。そう寒くはなかったと中田加寿子はいう。四日は信徒数氏に会われその晩も泊まれた。モラルサイエンス研究所の名称を、初めて公けに用いた場所のここには、中田 中家族は大正十三年二月十三日に移り、広池博士はその七畳半の間借の狭さを記念して、もう二度とないからと、折りにふれて单身お泊りなられた。この時は計三泊である。しかもその日は中田夫妻と三歳の娘とその上に、たまたま上京して来た神戸の会員木下夫妻との六人が七畳半に寝たことになる。中田はkk鈴木商店では月給一五〇円の高給とりであったし、間借の必要はなかったのだが、広池博士の全くの自力から出発するという御方針からのことである。

このあと博士は公私ともに多忙であったが、その一端を『日記』十二月には

十一日 丸井工場 十一日あつこ生ル 十四日和子生ル・

十四日 畑毛行ク 今回ハ惣人員五人也(の次に突如)

二十一日 朝林カツ子心臓マヒニテ急死(とある)

あまりにも突然、急死の字句が出て来たので、読む者の頭は混乱する。読む者どころではない書かれた博士自身も混乱している。このまえを少し整理しよう。

十九日投函の、博士より中田への長文のお手紙には林カツ子に変わりは見られない。ふしぎなことに、同じ日、遠く離れた三重県亀山町では、

千代子持参 十二月十九日後九時認 西川生(弥太郎)(手紙)

畑毛温泉 広池大先生 侍史 (千代子二十日夜着と『日記』にある。)(前略)

二 前便通りちよ結納式去る十五日挙行済候 安心願上候……

四 ちよは来年一月六日頃婚礼の見込み

五 ちよ先方参りて後の心得を充分御説明願上候

二伸 中田母堂在豆中なればよろしく御伝願上候

林 茂夫様段々よろしく 浪江様も近々御出豆の筈に御座候

(表封筒に 博士直筆で 願調様子 と記されてある)

この二葉の手紙の書き方と加筆の具合には、平常通りで変調は全く見当たらない。しかも病人は、西川ちよの父上の手紙で故郷の順調さを目にして、安心は増している筈である。この後、カルテなどの物証は全くないため、博士は心臓マヒといわれても、具体的には論議できないが、いまは『日記』を手始めとして経緯を見よう。

十二月二十日 夜、千代子来る。

十二月二十一日 朝、林カツ子心臓マヒにて急死。

〔欄外〕命がけの仕事。

同夜二時(実は二十二日午前二時)、母上来的(林カツ子の母、波江子)。

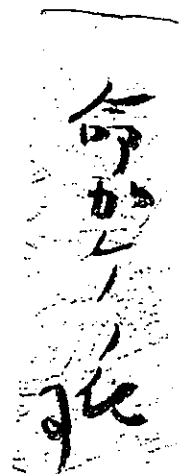
十二月二十二日 朝、親族来る。同日午後三時出棺、火葬。

畑毛の村民、みな子に同情して一回会葬す。

十二月二十三日 一同帰亀(山)。

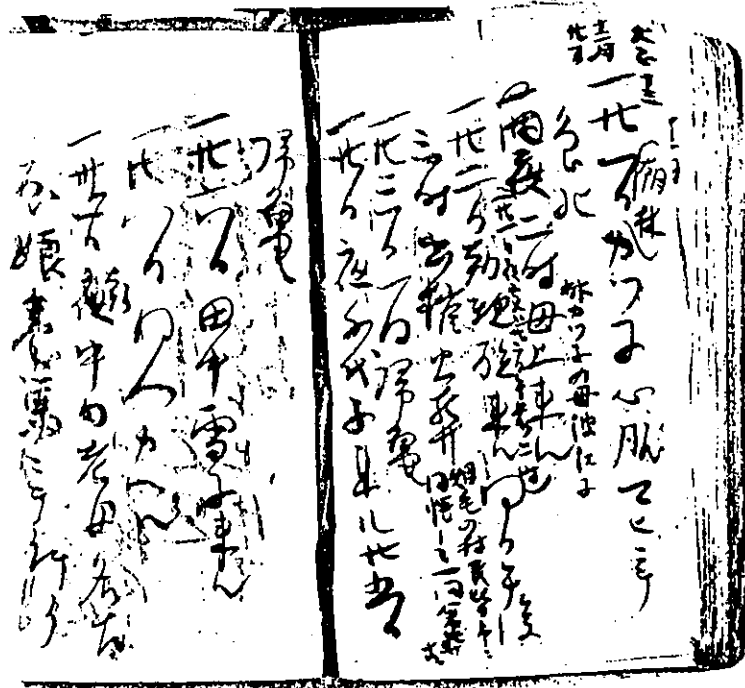
十二月二十五日 (西川ちよ) 帰亀(山)。

十二月三十一日 朝、中田老母、名古屋娘危篤にて行く。



六十五年後の今日、西川ちよさん自身の結納婚礼の最中に偶会した想出話をかいつまみ、先述に続いてお伝えしよう。

他の一室には、その頃、林さんの娘さんが、肺が悪くて療養かたがた泊まって居られました。伊豆に居られた娘さんも、病が進んでいたのか、当時は治らぬ病気でし、或る日急に容体が悪くなり、中田のおばあさんの我が身わすれての、親切な介抱もその甲斐なく他界せられ、その時一同は深い悲し



みでした。急の報せで母上林なみえさんも亀山から来られましたが、実にお気の毒な事でした。その後も林さんは広池先生に何かと、たよられた事と思います。

これより十年の後、杉本徳次郎氏のお骨折りで、島津源蔵氏始め京都財界人二五〇氏にご講話、その翌日、指導を望む人につき、以上を例に引きながら、真剣なお話があった。

『日記』昭和八年十二月五日

中田………を集めて幸村氏の将来すなわち営業その他の事につきおはなしあり。なお重要な御注意あり。その大要左のごとし。

一、本人はすべて博士の御指導によりたきとの事。……従来宗教のごとくその金をこちらに金させるごとき事なし。さりとて財産も本人も家族もこちらに引き受けて世話する事なし。(古来聖人においてもその例なし)……

知徳すぐれておれば全快の上は将来神様の前に有用なる人物となる可能性あるをもって世話をしてやる。……

今日まだその心が利己的本能をはなれたのではないのです。他人を勞して聖人の御話をきけば安心がでくるのでは、まだ真にたすかったのでもなければ真に安心が出来るのでもないのです。真にたすかると言う事は自己を犠牲にして真に人に安心を与えたい、しこうしてその人に助かってもらいたいと思う心が自分の心も病も助かるのであるのです。

現に博士は……又大正十二(三)年伊豆畑毛温泉にて肺病の林の娘を抱いて介抱なされしなど生死のちまたを往復されたのです。博士は正にかくのごとくに生命を賭して真に他人の安心幸福のために御苦勞を続けられ

たのである。

誰しも右のごとき苦勞をして人を助ける心が出来れば自分の不治の病でも助かり運命も開けるのである。

右将来における重要なお話でありましたから筆記して置きます。(中田 中記)

(中田の筆記文に中心部は博士加筆)

さらにその二年後、すでに博士一生の念願の、道德科学専攻塾開塾後約八か月、昭和十年十一月二十八日根本神壇に於ける御霊祭の講演の下書には、上記と同じく三項の生死のちまたをくぐり抜けた例のあとに、

一、林の子

として講話して居られる。その三項あとに、

一、これが伝統なり

と特記の字句が見える。そのすぐ次に、

一、誓 先方にこれこれの事をさす

右の事を誓いし事なし

こちらにてこれだけの事をする

……

一、御話の前に、神様に御願い致し御供えする……

さらに翌昭和十一年六月二十四日、研究所創立十周年、専攻塾創立一周年記念式に於いても二度としないといわれて、「モラロチーに依る人心開発及び人心救済事業の成立の歴史の概要」の、すなわち「子の歩み越し道」を講演された。亡くなられる二年前の最晩年のことである。これは、この小論の主題としたことと同調している

ので、その部分を上記二種をまじえて再現しよう。

モラロチー団体は成立以来だんだん大きくなり、いまや学校も出来上がった。しかしこうなった原因は、モラロチーの研究をやったり、また講演や講習会を開いたからではない。これは形式的な原因で、今日になるには、べつに真原因があったのである。もし形式的な原因によって発展してきたものなら、その団体は消えてなくなってしまうはずである。それでは万世に続き、つたわっていかない。……発展して続くと言うことは、学問や講演や講習会や学校だけでは、いかん。一時的にはよいが、永久には続いて行かない。このことを知っている人は全世界に一人もいない。……ドイツのコッホという学者はコレラ菌を、自分は試験台になりますと、飲んだのですが感染しなかった。それはその精神が慈悲至誠の精神、犠牲の精神であるからである。……道德的の強いものはうつらんのである。

今一つ重大なる仕事を、最後にお話を致します。

大正十三年に中田講師の縁故にて、肺患者である林カツ子嬢十七歳を、もとより無報酬にて預かった事がありました。これももとより全く人心救済のために、その一族の人心を救うために本人の病を助けたいと思ひ、至誠慈悲の心にて預かったところが、急に変調を来たして結核菌が進んで心臓を冒す事となったのであります。

よって親元に打電したれど、すぐには親は来れないのです。そのうちに病が急変して十二月二十日の午後には余程ひどくなったので、医師も急いで親を呼ぶがよいと注意するほどでありました。そこで勿論電報をうちましたが、その夕刻より一大急変を来たしました。中田講師にも打電しました。

夜に入って患者は苦痛を訴えて老母にしがみついてくるしむのです。御老母は頑丈ではあれど六十五歳の

老体であるので、夜半の頃には疲労してしまいました。そこで私は之れを見るに忍びず、私が代わって介抱しようとして申しました所が、御老母の申さるるには、「先生はモラルサイエンスの大成という大事業があるので、すから、ただ今死んでは大変です。私の老軀はここで死んでも差し支えありませんから、今夜は私が看護致します。」と申しました。

そこで私が考えますのに、今夜この場合、結核を恐れて、御老母一人に介抱するにせよ、今夜私が介抱して結核に食い込まれるような事あるにしても、そんな薄弱な私の造ったモラルサイエンスはその生命薄弱である。これにて全世界を助くる事は思いもよらぬ事である。真の聖人は死生の境地を往來して神様の御守護の下にその中を切り抜けた人だけである。かくて始めてその教説、教訓が生きた生命を有して永久に世界の人心を助け得るのである。されば私が今夜の介抱を避くるかもしくは今夜の介抱にて死に至る事あらば、もはやモラルサイエンスはあれどもなきに同じと観念して、遂に夜中より夜明けまで三時間以上も私が介抱して、明け方御老母に渡し、同時に医師を迎えて相談を致す筈にしましたところ、医師の来着後まもなく暁の頃に落命に及び、母親はそれよりおおよそ二時間くらい中田氏と前後して来着したのです。

私は自分の肉体の疲労と、親しくわかき人の死の惨状に対する感慨の情とに打たれ、発熱して四、五日間うち臥しましたが、結核にはおかさなかつたのであります。私は時に五十八歳でありました。

この外、以上の例ほど、猛烈な戦いではなかつたが、たくさん死の戦場を奔走致し、労働問題にも死生の間を出入せし事一再に止まらず、すべて血と汗との努力を続けたので、私は自分の静養をなす暇もなく、自然の衰弱次第に加わりて遂に今日になってるのであります。

一、今日のモラロヂー研究所に於ける研究事業やモラロヂー原典の翻訳事業や社会教育や学校教育がこの

ように発展して来たのは、もとより私の教えを受けた各地至誠の諸君の御努力による事は勿論なれど、元来私の家は私の祖先も神に仕え、且つ皇室のために無我の努力をして、父も人心救済に努力し、その上に私の四十年來の血と汗との人心救済に尽くした苦勞の結晶がその根本原因となつて、以上のような根本原理となつていたのであります。……

こうしてこのモラロヂーが出来た事を知っているのは、中田さんだけである。大正十三年頃の日記をくつてみると、ここが書いてある。こういう事を常に考えておつたが、研究だけではできない。全く命を捨てた慈悲至誠でできたのである。

この中田さんのおばあさんは、いま七十七歳である。あの時私が感染して死んだならばモラロヂーができておつても、なんの価値もない。私の着物も皆焼けという人もあつたが瓦の上に乾して着ておつた。私はこことごく神様に頼つてこのモラロヂーを建設したのである。……

(五種ほど資料はあるが、筆者はこのお話の時、博士より速記を命ぜられ最前列で、時折演壇を見上げながら速記した原本を提出した。それを元として上記を書かれ、その謄写版刷りにさらに加筆されて、刷り直したものを主な各氏に配布した。用紙は博士愛用の因州半紙である。往時ぼうぼうではあるが今尚博士の羽織袴姿の、珍しく原稿なしのお話は、その胸の内を拝して、鮮やかである。)

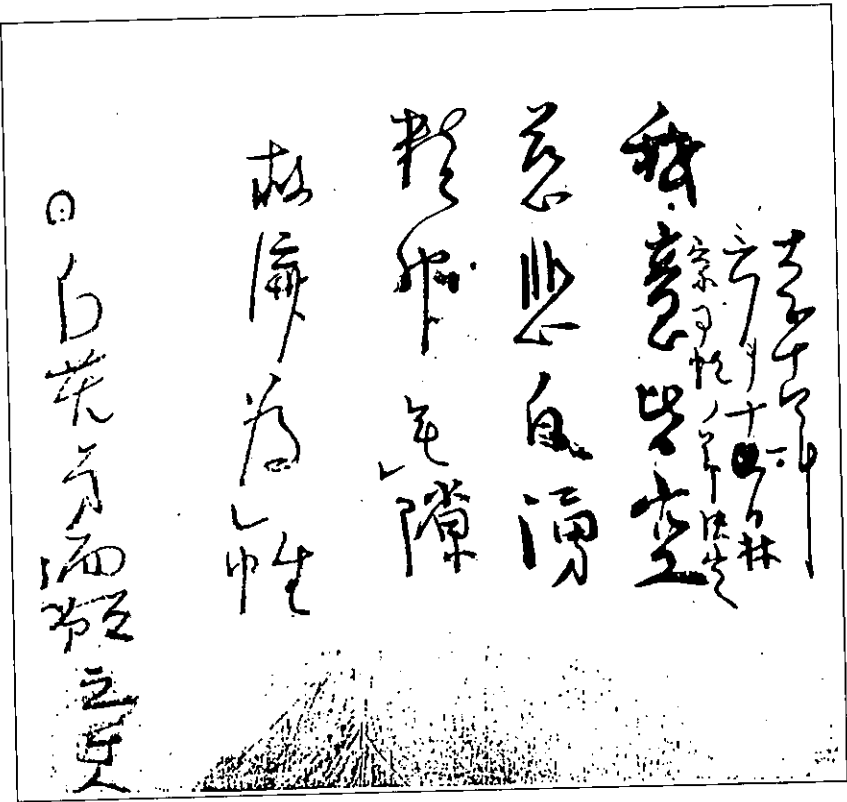
その折り博士は、中田た彌を壇上に招き、二人並んで松岡直喜氏撮影の16ミリ映画に姿勢をただされた。広池博士は写真をとられること極めて厳格で、スナップなどは中井巳治郎氏のみ許され、公式的写真でも、例えば道徳科学専攻塾別科卒業記念の集合写真には入っていないほどである。まして、二人で並んで公式に撮ることは、春子夫人とは当然であるから、この場合除くとして、空前絶後のことである。この場合は、広池博士が身を以て

救済の何たるかを示されたものであると、筆者は解している。

このような事蹟を、他に求めるとして、ソクラテス・イエスキリスト・ゴウタマブツダ・孔子あるいは聖フランシスなどにも、全く見当たらない。師叔尊に「慈悲がすぎた」と評された忍性律師だけは、超えると思われるが、その病人の一族の家運そのものの根底から正そうとした気配は少ない。しかし人類の指導者を遙かに超える忍性律師の膨大な事蹟は、生前でさえ「国賊」と呼ばれ、今は知る人もなく、取り上げる学者も僅かに辻善之助、中村 元、和島芳男ほか二、三。お墓は史蹟ではあるがそれは只鎌倉期の古いというだけの姿勢であり、小学校の庭を突切って辿り着く墓地は、盗難をおそれかどげとげの鉄線にかこまれて、無残なお姿であり、その公務員は日本一抜群に高い退職金だそうです。

そののちは、とうとうとして些末な字句の抽象的な解釈をのみ尊とび、したがって官僚的テクノクラートエリートの世界となり、ちやうど今日のひたいに汗した日本から財テク日本へ、一億総白痴から一億総バクチへ動くみちすじをみせてくれます。

与えられた紙数をはるかに超えたので、「実験」第二号の死去までに記録を止め、その後の林 浪江さん茂夫さん親子の「心をひるがえす事」なき精進など、回りの人々の強い協力など、初めからも含めてあと二百枚ほどあるが、全ては他日を期したいが、この小論のおわりに、筆者の低劣な考えを小ざかしく、尤もらしく読者諸兄におしつけず、博士ご自身の、その後の漢詩一つと、その一か月後のお手紙一通とを掲げて、博士ご自身に一応中幕を引いていただきます。



大正十四年六月十一日

林家事情ノ節決定

我意皆空 [我意皆空]

慈悲自湧 慈悲自から湧き

精神無隙 精神無く

救済為性 救済は性と為る

(研究部仮解読)

○自苦勞而頌之字人

大正十四年七月三十日 信(甲の誤か)州 広池千九郎 三重県亀山町 林 浪江様

拝啓 只今中田様御たちよりに相成委曲御事情拝承安心仕候

御供の義誠ニ難有存上候

御席の義一つにても御心もちにて御苦勞願上候……

林 おく様 御侍史

地所の件別紙の如く申上候へ共又よく考うればこれがほこりの心二なってもいけません 茂夫様を助ける心
使いが今日では第一ニ付真の誠にて茂夫さんの心も身も之を養う若干の物質も茂夫さんにつけて神様の御用
につかわせませす、自分のものと八思いません生命だけ助けて下さりませ 助かったいのちと之二ついで居る
物質は皆生涯神様の御用ニつかいますの真の誠の心にて今一だん深い御心使いの上からすべてを御運び被下
候ハバよろしと存候

心使い第一かと存候

うるも買うもそれがよろしと存候

(了)